



※メモ
 手入力の欄を埋めていくためには、聞き取り調査が必要です。
 アバウトであれば床面積から収容人員を予測して入力すると概略は計画できます。

(様式 電-16-0)

交換装置容量計算書(設計条件)

建物名称 〇〇地方合同庁舎

平成20年 8月 8日

1. 想定人員、台数

収容人員 S_a : 人
 会議室等に必要の電話機台数 T : 台
 G3ファクシミリ(ダイヤルイン端末となる) S_{fax} : 台
 長距離内線(内線延長)数 S_l : 台
 ISDN端末機(ISDN BRI)台数 S_b : 台
 ISDN端末機(ISDN PRI)台数 S_p : 台
 構内PHSの子機台数 S_{ps} : 台

事務所内の構内PHSの子機台数 $S_{ps(j)}$:

事務室名	台数
事務室(1)	10
事務室(2)	5

2. 係数

内線算出係数 k :
 全てのISDN端末について N :
 全ての構内PHSの子機について N :

0.6~0.9です。

操作手順

- ① この頁の入力値は全て手入力としています。
 実際の設計にあたっては、入居官署等と十分打合せ等を行った上で決定して下さい。
- ② この頁に入力した数値は次頁の計算書に連動しています。
 この頁を確実に正確に入力すれば以降は自動計算します。

交換装置容量計算書(1/2)

建物名称 〇〇地方合同庁舎

平成20年 8月 8日

1. 内線数

内線数(N_{is})は次式により算出する。

$$N_{is} = S_a + S_{fax} + S_1$$

$$N_{id} = S_b + S_p$$

$$N_{ip} = S_{ps}$$

ここに、N_{is}: アナログ内線数(IP 電話の場合も同様とする。)

N_{id}: デジタル内線数

N_{ip}: 構内PHS 内線数

S_a: アナログ電話機(一般及び多機能) 台数 台

S_{fax}: G3 ファクシミリ(ダイヤルイン端末となるもの) 台数 台

S₁: 長距離内線(内線延長) 数 回線

S_b: ISDN 端末機(G4ファクシミリ等BRI 端末) 台数 台

S_p: ISDN 端末機(PRI 端末) 台数 台

S_{ps}: 構内PHS の子機台数 台

電話機台数(S_a)は次式により算出する。

$$S_a = k \cdot S + T$$

入居官署と打合せのうえ決定する。

k: 内線算出係数*1 $0.6 \leq$ ≤ 0.9

S: 収容人員*2 人

T: 会議室等に必要電話機台数 台

注 *1 入居者の業務内容により決定する。

*2 入居者の人員の変動等を考慮し決定する。

$$S_a = 0.8 \times 272 + 13 = 231$$

$$N_{is} = 231 + 9 + 10 = 250$$

$$N_{id} = 3 + 0 = 3$$

$$N_{ip} = 15$$

アナログ内線数: N_{is} = 回線

デジタル内線数: N_{id} = 回線

構内PHS 内線数: N_{ip} = 回線

2. 構内PHSを導入した場合の構内PHSの基地局(CS)台数

基地局台数(S_{cs})は次式により算出する。

$$S_{cs} = \Sigma(N_{cs}/3) + \text{事務室カバーエリア外基地局}$$

ここに、S_{cs}: 施設全体の基地局(CS)台数

N_{cs}: 事務室カバーエリアの構内PHS 必要回線数

事務室内の構内PHS 必要回線数(N_{cs})は、次式を用いて「呼量による局線数の算出表」により算出

$$A_{cs(i)} = S_{ps(i)} \cdot N/36$$

ここに、A_{cs(i)}: 事務室内の構内PHS 発着基礎呼量[アールン]

S_{ps(i)}: 事務室内の構内PHS 子機台数

N: 2.8~12とし、明確ではない場合は、2.8を標準とする。

データ通信を行う場合は、6を標準とする。

基地局 設置場所	PHS台数 S _{ps(i)} [台]	呼量 N [HCS]	基礎呼量 A _{cs(i)} [アールン]	回線数 N _{cs} [回線]	各室基地局台数 [台]
事務室(1)	10	2.8	/36	0.78	3
事務室(2)	5	2.8		0.39	2
					/3
全事務室基地局合計					2
事務室カバーエリア外基地局					1
施設全体の基地局数 S _{cs} [台]					3

入力必要

